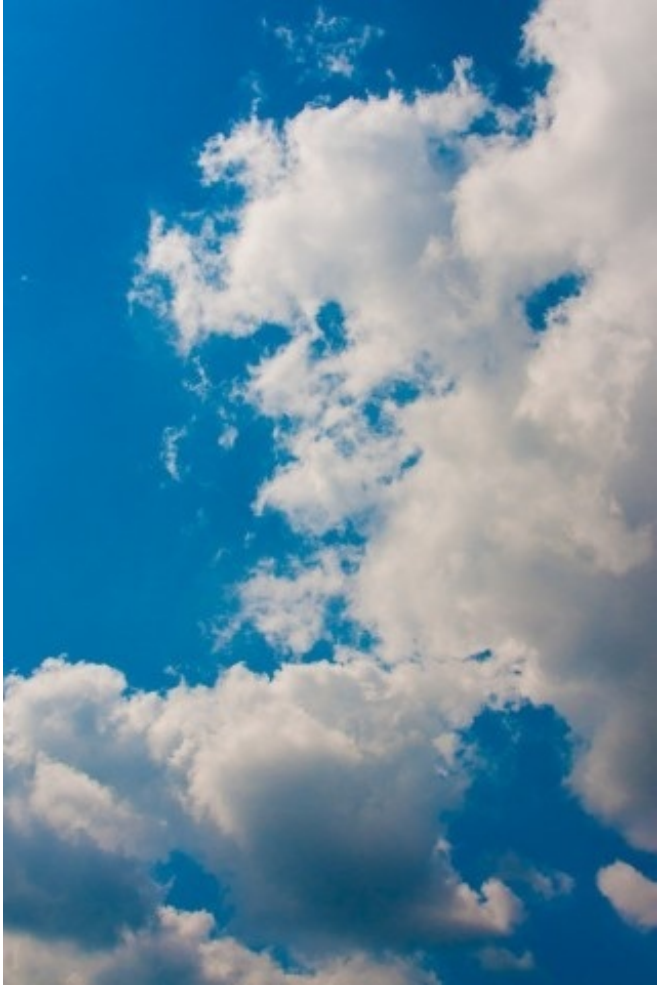

Brave death that nobody knows

…オケアノス

この世界の名前であり、誰もが生まれた時から知る
最初の言葉
声に出さずとも知る、大地の名

悪戯な雲が、青空を邪魔したり
飛び交う鳥達が、謳歌を唄い舞う
安らぎの緑が絶え間なく続き、それぞれの大陸には各々の個性を生かした文化が根付く

しかし、かつてこの世界は 【躊躇った】
何を躊躇ったのかは分からない、しかし
そのせいで、この世界は灰色の死に包まれるはずだった…

そう、今この安寧があるのは、一人の勇気が小さな命達への愛を貫いたからだ

それを知る者は、ほとんどいない
歴史は風化し、長き時を経て今があるのだから
それを罪と憎む者、それでも安寧に埋もれる事を許す者、互いの最たるがこの世界の柱となっている事すら誰も知らない…
誰も、いや、知らないのは

ニンゲン、だけだ

知る事は、必然ではない
だが、知らない事は、とても悲しい
知る事で悲しい事が起こるかもしれないけど
その必然が、徐々に訪れようとしている

かつて理由などないが、それでも人を愛した
たった一人の尊い犠牲が残した
今という歴史が 少しずつ、少しずつ定められた運命に導かれる

一彼は言った、消える命を悟りながら
未来に、届かぬ想いだと分かっていても託した言葉

それは、きっと世界だけが聞いていたのかもしれない

「…生きてるから、躊躇う事はある。だけど、その先に…その命の重みを知る

決して、その命を絶やしてはならない。そんな僕の覚悟に…悔いはないんだよ」

その言葉を、忘れられた歴史を、悲しみを乗り越えた…今の尊さを人間が知る時は、やがて来る
そう、運命が記したのだから
しかしその先、結末までは
まだ朧げで

それも全てを知る人間達次第だと
世界は知ってほしいのかもしれない

ーRagnarok Saga

自分が、能力的に勝っているとは思っていない
ただ、少し開発面で知識があるだけで

一選ばれるとは思っていなかった

築き上げた、人間との触れ合いの場を無言で離れ
与えられた運命に従う
彼は言った、いや「彼」と例えるべき程小さい存在ではない
そのお方の意思を、僕は受け入れる事にした

「…ここは、暫く使われていない場所らしい」
「その方が集中出来るよ」

荒れているというより、自然の力が増して支配されたその場所は、かつて物質的な場所だったようだ
僕の連れが言うには、ここは力の邪魔になる負の素が少なく、空気が綺麗らしい
確かに今からやる事は、とても大事で失敗は出来ない。ならば環境にも真剣に、シビアに選別しなければならないと思っていた

「…」
「…今の内、吸っとけばいいんじゃないか？」

連れは、僕がポケットに入れていた
年代物のパイプを促した
人間の世界に来てから、知った身体に悪い毒
そうだと分かっていても、何となく今まで連れ添ってきた古びたパイプ、お気に入りだったから何時も手放さなかった

「…火は？」
「自分で出せ」

つれないと思いながら、口にくわえ
火をともし、パイプを味わう
あまり長くは吸えないな。空気を汚してはいけないから。適度に味わって火を消し、杖で空気を浄化した

「…お前は、変な奴だな」

今からやる事に必要な「魔導陣」を地面に描く為に、「ローケスト」と呼ばれる先端に特殊な粉が詰められた杖を手に、陣を描く
その過程を目にしていた連れが、僕を皮肉った

「…気に入らないかい？」
「…批判派でもないがな、守る程の命でもないと思っている、それに…」

僕は陣を描きながら 彼の言い分を黙って聞いていた
一寸の乱れも許されない、僕達の様な魔を託された者はこの乱れこそがこれから行う行動に対して致命的だと十分に理解しているからだ

「それに…お前の【好き】という理由が見えない」
「…」

連れが言う【好き】の対象は
人間の事を指す 【好き】だから、こんな危険な事をして
死ぬかもしれない運命を受け入れた だけど連れはまだ聞いていない

僕が【人間が好き】だという動機を

「…答えなきゃ、いけないかい？」
「出来たらな…」

連れは、別に無理強いをしている訳ではなさそうだ
でも、僕もあまり語りたくはない
好き、という感情の発端を。僕はいまいち理解していないのだから

だから擁護派の中では「異端」と言われている
人間が好きな動機を、いまいち自分でも理解していないから
根拠のない人間への愛を語るから、とかね

「…でも、人間って面白いよ？」
「面白いが動機か？」

そうじゃない、と首を振ったが
何となくめんどくさくなってきた

良いじゃないか、理由のない愛なんて。どんなことにも理由をつけなければいけない法律なんてないはず
好きだから好き、それでいいんじゃないかと

「…あの不死は怒るだろうな」
「だろうね、黙って自分で決めた事だから」

ここに来る事を、やろうと決めた事を
あの不死に、友達には言っていない
彼が知る頃はもう、言葉を交わす事も無いだろう

話したら、多分 反対するだろうからね
多分、これが最初で最後の彼への裏切りかもしれない

一ごめん、も言わずに
卑怯者だな、僕は

「…レナード、重複結界を」
「…分かった」

連れ…レナードは両手にありったけの力を結集させ
幾重にも重ねた結界をこの場に張った
これならばそう簡単に誰も立ち入ることはできない

後は…

「…」
「…俺は、外に出た方が良いんだろうな」

僕はレナードの顔を見ずに頷いた
これは一人で、精密的に、繊細に行わなければいけない。物凄く難しい作業だ
彼の存在が疎ましい訳ではない、必要なのだ。この場から去る事は

「…終わっても、数分間くらいは生きてろよ。全てが終わってもう死んでたなんて許さないからな」
「出来るだけ…善処するよ」

レナードは、そう言って
その場を去った
結界はもう誰もこの場に立ちいる事を許さない

一人、陣の中央で
僕は「ある方」に託された六つの素を 静かに宙へと漂わせた
偉大なる素、六大精霊王の力

そして…忘れていた、もう一つの素

それも取り出して、これから死と隣り合わせの

一希望を生み出す使命を全うする

魔を生み出す事は、とても難しい
間違えれば僕達の様な「人間でない存在」でも簡単に死んでしまう
いや、成功しても僕の命は僅かに残るかどうか

ふと、不死の友達を思った
友達、という言葉も人間の世界に触れてから知った
くすぐったい言葉だ

彼は、泣くだろうか
叫ぶだろうか、怒るだろうか
だけど、何時か君も

一人間を、愛してくれると信じている

そして、愛用の杖を掲げ
【魔の生誕の儀】を始めた…

一お主の命は尊い、誰もが知らずとも、精霊が、自然が、世界が…永遠に語り継ぐ
約束しよう、次も…

人を愛する存在として生きる権利を…

The crimson lion which gallops in the sky

それは、雨の日だった
寒くならないようにと、少しだけ配慮があったのか
それは愛情なのか、しかし行為的には許し難い
小さな籠が、質素な布にくるまれて
街の片隅に置かれていた

調べなくても分かる
その物体は命を捨てたという証拠。ゆっくりと布を開くとまだ幼い赤子が眠っていた
耳元を、赤子の口に近付けた
呼吸をしている。胸も動いている
眼は閉じたまま、開けば母がいるはずなのに
もうその姿らしき存在は何処にもない

私は、起こさないように
ゆっくりとその赤子を抱いた
少し声を出したが、まだ眠っている

赤子は体温が高いと言うが、本当に暖かい
それは、約15年前の事 小さな、私が拾った命は今…

ーカシャアアアアン！

「うわっ！？」

カウンターでグラスを拭いていた私は
その騒音にうんざりしてため息をついた
そして振り向くと、気まずい感じの表情を浮かべた

我が子、が居た

「…ご、めんなさい」

僕はしまった…と、思いながら
その言葉しか浮かばず、父さんの眼差しに緊張していたお皿の
整理をしようと思っただけなのに、つい落としてしまったのだが
これが何回目なのだろう？
僕はお皿と相性が悪いのかもしれない

お小遣いを貰う為に、父さんが営む
酒場の手伝いをするのだけど
ある程度のドリンクが作れるだけで、あまり役に立ってない
掃除とかは出来るけど…何となくうっかりが多発して、被害が度々発生する
その度にお小遣いの価格が下落する

「…何枚目だ？ルーク」
「わかんない」

実際何枚割ったか分からない
お小遣いの基準値があれば、多分減算していくと
マイナスになるかもしれない
皿が悪い訳じゃないけど、受け身を取ってくれたらなーと場違いな事を考えてしまう

「…お小遣い、恐らくマイナス値だろうな」
「うっ…」

正直な話、そうかもしれない でも
まだ欲しいものがあって、必死でお手伝いしていたのだ
売り切れるかもしれないと心の中で焦りながら、僕はどう弁解すればいいか考えていた

すると、酒場の電話が鳴った
古いタイプの、レトロな黒電話
父さんは意外と骨董品が好きだったから、利便性を重視せず、新しいものになかなか触れようとしない

そんな父さんが暫く話して、苦虫を噛み潰した表情でグラスを拭いていた布巾を置いた

「…はぁ」
「どうしたの？」

あんまり良い内容ではなさそうだと思いながら
先ほどの皿破損事件をはぐらかしながら聞いてみた
するとジロッと僕を見て、また一つため息をついた

「…エンリケがここに立ち寄るそうだ」
「えっ！？本当！？」

僕はカウンターに乗り出して、笑顔満面で父さんに問い詰めた
相変わらず父さんは乗り気じゃない表情で頷いた。と言う事は本当なのだろう

「やった！また会えるんだ！」
「…あのな、ルーク」

父さんは何か言いたげだけど、僕はエンリケに会えると言う事だけで胸がいっぱいだった
でも後どのくらい時間がかかるのだろう？目を輝かせながら僕は時計を見た

「…空域にはもう既に入ってる。ポートにほぼ近いらしい、10分位で着くんじゃないか？」
「じゃあ！じゃあ！僕迎えに行ってくる！」

10分なんて、もう少しじゃないか
この町のポートにもうすぐ到着すると分かった瞬間、僕は皿の事など忘れて酒場を飛び出そうとした
その時父さんが何か言おうとしたけど

僕は、会いたくて会いたくて
街の南に位置するポートへと走り出していた

ーブウゥン

音声通信を切り、深々と椅子に座った
相変わらず愛想が悪い、まあ俺が酒場に立ち寄った後の惨事を杞憂しているのかもしれない
それでも付き合いは長い仲、そうそう追い出したりはしないだろうと、目的は変えなかった

ここは、今空を巡回している戦艦

トリックスターの内部
目的地はもう既に、決定していた

「あーようやくグリーフの街に着くのね」

俺の後ろで背伸びをしていた、作業着の女の子が背伸びをした。街に着く、という疲労感からの解放を訴えている裏側を知っているからこそ、少し悪戯な笑みを浮かべたが
すぐにそれがバレて、何か硬い鈍器が飛んで顔にめり込んだ

「いでぇっ！？」
「嫌いな顔だったから潰したの」

地位的には俺の方が上なのだが、どうもこの少女…トライには勝てない。そういう教育を施した義父の責任もあるが…と、操舵モニターを捜査している太ったペンギンを睨んだ

「おーい、ハンス。教育がなってないぞー」
「アッシの教育は間違ってないでヤンス」

振り向いたペンギンは…ペンギンと呼ぶにふさわしいのか分からない位にメタボで
愛用のヘッドホンをつけて、それ以外はただのデブペンギンだが、これでも俺の右腕
いわば副船長なのだ

てことは俺が船長…な訳で

「ふふ、でも久しぶりね。グリーフに訪れるのも」
「あそこの酒が一番うまいからな」

無類の酒好きを知ってるもう一人の女性、クレアは
白衣を着たこの船の船医
ポニーテールの大人しい清楚な女性だが、時には厳しい。医師だから…まあ、その、な

「飲みすぎはだめよ？リカルドさんに愛想尽かされちゃうわ」
「売り上げに貢献してるから良いじゃないか」

実際、俺と船員がほぼあの酒場を占拠し
追いつかない程の消費が発生するので
リカルド…酒場の店主にとっては嬉しいのか厳しいのか。複雑だろう

あいつは元々穏やかな方が好きだからな

「さて、トライ。賭けてみるか？」
「…ムカッ」

トライに賭けを提案したのは
何時もの事 絶対来るはずの人物が、最初に誰に話しかけ抱きつくかのギャンブル
勿論、金銭を絡ませる訳ではないが

「少し色気が出て来たから、まあ…4割か？」
「むきーっ！7割よ！低すぎ！」

そうは言っても多分恐らく、だと思う
俺はにやりと笑おうと思ったが、また顔を潰されると思ったのですぐにそっぽを向いた

The partner who clings was always decided.

息を上がらせながら、僕は走り続け

ようやく街の中央にあるポートの出入り口にたどり着いた
少し早まる気持ちで胸がドキドキしていたけど、動けない程疲労している訳ではない
今だって、早くポートの中に入って、恐らく到着寸前のトリックスターを見たいのだから

いったん深呼吸して、ポートの中に入る
その時に僕の顔を見た兵士が、何かを察した

「…お前がここに来るっつーことは…」
「エンリケが来るんだよ！」

やっぱり、という顔つきで
複雑な表情を浮かべた兵士
歓迎されてないと言う訳ではない、エンリケが来ると多少街が荒れる…からうんざりしているのだ

まあ…お酒が入ると暴れる事もある…場合も然り
破損した物も幾つかある
そんな痕跡を残しかねないトリックスターのメンツが来ると言うだけで、兵士にとってため息が出る要素は十分である

「ま、まあ…大目に見ようよ？一生懸命働いてるんだし」
「働きに反した破壊活動を辞めてくれたら、何時でも快く歓迎するよ」

まあもう来るのだと分かっているのだから、兵士もそう非難しない。また背を伸ばして警護の体勢を整えた。僕も何となく申し訳ないかな…と思いながらポート内部に入った

ーそこは、様々な人々が行き交う場所
ポートというだけあって色んな飛空挺や戦艦が駐留して、休憩したりメンテナンスしたり、仕事をする事もある。何時だって騒がしい訳ではないが、今日はそこそこに賑やかだ
僕はポートの奥にある外が見渡せるワイドガラスに急ぎ足で駆け出し、もうすぐ見えるはずの赤い戦艦をドキドキしながら待っていた

ーゴオオオオォォォォ…

飛空挺も、戦艦も
航空音と言うのはそう変わらないけど
僕には分かる、この近づく航空音は
待っていた、会いたかった、話したかった

あの人がキャプテンを担う、戦艦
トリックスターだと…

ードガァアアアンン

「うわぁああ…っ！」

濃い雲を切りぬける破壊音と共に
赤をモチーフにした戦艦が姿を現す
そう、様々な歴戦を乗り越え、最強とも言われている憧れの戦艦、トリックスターがワイドガラスに姿を見せつけていた
さりげなく見えた操舵室から、一番会いたかった人が、ワイドガラスにへばりつく僕に気づき手を振っていた
これから駐留所への入り口に入り、停止するまでしばらく時間がかかる
着陸態勢に入ったトリックスターから一旦目をそらし、僕は駐留所出入り口の近くで彼らがここに来るのを待つ事にした

ー出入り口から来る人は、そりゃ様々で
出てきたかな？と思ったら違う人
その度にちょっとがっかりして、また静かに待つ
そんな光景を知っているポートの受付嬢が少し笑っていたのが恥ずかしかった

何時も、ここで 皆と再会する
その時がとても嬉しくて、楽しくて
幸せな時間がひと時だけど過ごせて

別に父さんだけだから幸せじゃないとか、そんなんじゃなくて、今から来る人は沢山の世界を、

出来事を語ってくれる
小さなこの街が今の僕の世界
でもあの人は、エンリケは僕の知らない世界を知っている。その話を聞くだけで胸が躍るんだ

今度は、何を…話し…

「ふーぁあーーっ！到着だぜー！」
「！？」

少し意識を油断した瞬間、豪快だけど呑気な声が聞こえてきてびっくりした
振り返るとそこにはあの、赤髪の眼帯。僕にとってのあこがれの人。見るからに歴戦をくぐり抜けた強さと勇猛さ、それに交わる繊細さも兼ね添えた

「よお、ルーク。お・ま・た・せ」
「エンリケ！」

そう、エンリケが一番にポートに入ってきていた
僕はその姿を目にした瞬間、思い切って飛びついた
全然僕と比較にならない体格で身長も高い、だけどそんな事関係なしに嬉しくて抱きしめた

「ははっ、ちょっとは背が伸びたか？」
「少しだけどね、でもエンリケにはまだ届かないよ」

何時かは同じくらい背が伸びたらいいのにと
目線を上げた
目の前に映る大人の顔つきは、十分な憧れを抱かせ
何時かこんな大人になりたいなんて、思ったりしてもおかしくない

…と、思っていたら
エンリケがニヤリと笑い、少し目線を後ろに向けて、笑いをこらえながら後ろを向いた

そこには…

「…最悪、キモッ」

一最悪、と呟いたのは
見かけは可愛いのに、言葉の毒が最近毒性を増してきた…金髪の女の子
目つきも冷ややかで、エンリケを抱きしめている僕を冷めた視線で威圧する
そのトライに、エンリケは危険を承知でからかった

「な？俺が最初だっただろ？賭けは俺の勝ち…」
「…だから？」

だから？と言う言葉の切り返しに、エンリケも流石に冷や汗をかいた。何と言うか、トライの背後に凄いオーラが見える。穏やかではない、殺気に近い
恐らく僕が最初に話しかける相手を賭けていたのかもしれないが
こんな事が分かっていながら、勝利宣言をするエンリケもどうかと思うし
僕だって一番会いたいのはエンリケだとパターン化していると認知していると思っていただけに
毎回なぜ、トライがエンリケと張り合うのかが分からなかった

…と、思考を働かしていると
トライの物凄く重いため息が、心を潰しそうな位伝わった

心が弱いと、多分種レベル位に縮小されてもおかしくない

「あのね…大体、抱きつく相手が間違ってないかしら？男にべったりなんて気持ち悪いわ！」
「い、良いじゃないか…会いたかったし」

子供同士の張り合い？語り合い？いがみ合い？とにかくその幼い語り合いに挟まれたエンリケはやれやれとその光景を傍観していた
すると残りの二人がゆっくりと姿を現す

「あら、相変わらず負けちゃったの？ふふ」
「クレア！アンタまで…敵に回るつもり！？」

一人の女性、トライより少し年上の清楚な白衣の女性はクレアさん。トリックスターの船医であり、とても綺麗で…男性に人気がある
その横に居たのは着陸書類を記載していたデカイペンギン、ハンスだった

「トライ、その歳で賭けごとは感心しないでヤンス」
「金銭がらみじゃないから別に良いじゃない！」

同情…とは少し違う言葉が次々とトライに向けられ
彼女はますます顔を赤くして頬を膨らませた
とりあえず…エンリケから離れた方が良いかな…？と距離をそっと置いた

まあそれでトライの不機嫌が収まるとは思ってないけど…

「ふふ、ここで固まってたら他の通行人の邪魔になるわ。エンリケ、リカルドさんの酒場に行きましょう」
「おう、飲むぞー。血液がアルコールになるまで飲むぞー」

健康的な表現とは思えないエンリケの発言に、クレアさんも苦笑い。僕だってあの…酒がフルに回った時のエンリケの惨事を何度か拝見してるので、そこは心配だったりする
クレアさんと同じタイミングで苦笑いすると、またしてもトライが憤慨していた

「…クレアとは、息が合うのね。へー」
「と、トライ…そうじゃ…」

これはどうしたら機嫌が良くなるのか
年を重ねるたびにその対処が難しくなる
ましてや今お小遣いが少ないので、物品で何とか出来そうにはない
一方エンリケはクレアと僕との意気投合ににやにやしていた

「ルーク、その気があったらがっつり奪えよ？それじゃ男じゃねぇからな」
「ち、ちがっ！？」

思わぬ発言に僕も顔を赤くする、一方クレアさんはちょっと拗ねている
そんな火種をまき散らすエンリケの言葉に一番うんざりしていたのは

「…アンタに男らしさを語って貰いたくはないわ」

と、呟いたトライだった

一暫くして、面倒な書類を書き終えたハンスも近づいて、皆が勢ぞろいした所で酒場に向かう意

思を一致させた
多分騒がしい、少し面倒だけど
賑やかな、少し世界が広がる酒場の一夜が
訪れるのだろうとウキウキした心を抱いた

ポートを出てから、僕達は
酒場へと賑わいながら、歩いて行く
話すタイミングはもう少し後にして欲しいと思いながら、それでも止まらない談笑に互いに笑う
賑やかな一行が来たと、街の人も笑みをこぼし、または苦笑いし、またはため息をつき

トリックスターはこの町にとって
様々な印象を持たれているけど
決して憎めない、良い人たちだと皆分かってる
ただ、少し騒々しくて 後始末がやっかいなだけ

このまま歩いていけばもうすぐ酒場、と言う時に
僕は一つの露天の前で足を止めた
その行動にエンリケが気づき、他の船員も同じく止まった

「ん？ルーク、何かあるのか？」
「あ…うん」

僕の目の前に陳列されていたのは、普通の地図
世界地図で、決して高級品ではないが
僕のお小遣いではなかなか買えない、贅沢品に近い
隣に居たトライが、僕がその地図を見ていたのに気付き、陳列棚から取り出して色んな角度から見ていた

「ただの地図じゃない…これが欲しいの？」
「あ、うん…」

地図、確かにただの地図だけど
僕にとっては意味がある

僕はこの町から出た事はない
少し外に散歩に出た位で、他の土地を知らない
つまりこの町が今までの僕の「世界」だった

勿論いろんな国や大地がある事も知っている
新聞やテレビ、色んな情報で色んな事を耳にしても
僕は本物を知らない

そんな時、せめて
僕の部屋にこの世界地図があったなら
何となくただの部屋でも、世界の一部になれるような気がして、欲しかったんだ
テレビなんて、贅沢言えないし。新聞は字だらけで世界観を感じさせない
だから、地図を買いたくて。今までお手伝いしてきたけど

「中々手が届かなくて…さ」
「ふーん…」

トライはその意図を知らずに、地図を陳列棚に戻した。するとからかいながらエンリケがトライに提案した

「ワンデートで…幾らか、とか…グボオオオオッ！？」
「次はえぐるぞオラァ！」

何が言いたかったのかあんまり伝わらなかったけど、多分トライの機嫌を損ねる事を言ったんだと思う
決して弱くはないエンリケも、トライにはあえて弱みを見せて、何となくそんな環境に楽しんでいた
本当は…いろんな所で聞くぐらい、凄く強いって知ってるけどね

「イテテ…ま、まあ。ルーク。欲しかったら自分で買うんだ。俺は買わないからな？」
「分かってるよ」

買わないってわざわざ言うエンリケに、少しムッとしてくれたトライ。でも僕はその意図を何となく理解している
自分で買う事に意味があるって事を
どんなに時間をかけても、自分の力で手に入れる事の大切さを言いたかったんだと思う
だから僕は…エンリケの言葉を非情とは思わない

でも、予定は狂ったかな
そう、僕は先に地図を飾ってから。言おうと思っていた決意があった

トリックスターが次この町を訪れたらと決めていたから、地図は後回しになってしまうけど
それでもいい、前から決めていた事なんだから

その気持ちを今、小さな地図で躊躇ってはいけない

置かれた地図を後にして、再び歩き出し
酒場が見えてきた

もうすぐ楽しく、騒がしく、ちょっと厄介でうんざりだけど
充実する時間が始まる

その中で、僕は 楽しい空気を切り裂いてでも
自分の想いと、決意を
伝える勇気にけじめをつけなければいけない
その決意の眼差しに気づいたのかどうかは分からないけど、エンリケが遠目で少し微笑んだ気がする

感じ取ったのかもしれない、僕なりの小さな成長を…

The regrettable fault of a brave lion

ようやく辿り着いた酒場
走ってポートに向かった距離と、ポートから歩いてくる距離は変わらないのに
賑やかと戯れと、寄り道で時間に差があった

軽く開くドアを開け、僕は父さんに皆が来た事を知らせる為、率先して中に入った

…が

「…」
「…父さん？」

何時ものようにカウンターでグラスを拭く父さんの顔つきは何処となく不機嫌
確か、電話を受け取った時もあまり良い顔をしていなかった気がするけど…それにしては愛想がよくない
声をかけようと思ったら、押す様にして皆がぞろぞろと入って来て、そのタイミングを逃した

「よお！リカルド！元気にしてたかー！？」
「…」

エンリケがさも懐かしそうに声をかけても
父さんは返事をしない
流石のエンリケも拍子抜けして、クレアさんやトライは父さんの異変に少し気まずそうだった

「何か…リカルドのおじさん。機嫌悪くない？」
「そうね…あまり好意的な表情ではないみたいだけど…」

その違和感に他のメンバーも気づいて、それでもエンリケ達は父さんに近付いた
クレアさんやトライは恐る恐る、様子をうかがっていたが、一方のエンリケはそんな事に怯まずズカズカと近づいてカウンターに肘をかけた

「おい、せっかく来てやったのにその無愛想はなんだよ？」
「…元凶が原因を聞くのか？」

エンリケが父さんの不機嫌の元凶と言った瞬間、クレアさんはもしかしたらと、代弁を買って出た

「あ、あの…確かにお酒が入ると多少場が荒れてしまいますけど、ちゃんと後片付けしますし、それに…お金も…」
「…払って、いると？」

…？

払って、いると？

その言葉にクレアさんは疑問符を浮かべたが、そろーっと去ろうとするエンリケのコートをすかさず掴んで表情を冷やかに変化させた

「…エンリケ？どういう事かしら？」
「…リカルドおじさんの言葉を聞いて、はいさよならーとはいかないわよ？」

トライも詰め寄り、他のメンバーもじっとエンリケを見つめる。囲まれたエンリケは冷や汗をだらだらかきながらもう言い逃れはできないと覚悟を決めて
蟻の様な小さな声で、とんでもない爆弾発言をした

「…あの、お金。払ってない」

…

そして、父さんが決定的な罪状を述べた

「今までの酒代、破損費用、もろもろは全てツケだ」
「…です」

…今明らかになった現実に、しばし無言と静寂が
しかし明らかに申し訳ない現状に、真っ先にクレアさんが焦りながら問い詰めた

「つ、ツケって…貴方お金は何処にあるの！？」

「ハンスからお小遣い貰ってるんじゃないの！？」
「そうでヤンス！酒代を見積もって後で払ってと…何時も渡して…」

仲間の内、一番動揺しているのはクレアさんだ 性格上、多分今のカミングアウトの罪状レベルが半端じゃないと感じているのだ
エンリケはもう視線を泳がせながら、ぼそぼそとそのお金の行方を正直に告白した

「…げ、ゲームというか…賭け事…に？」
「…」

エンリケは賭博も好きだったと言うのは知っていた
だけどどのレベルまで好きかどうかまでは知らない
その、この酒代と破損費用を消費するほど…依存しているのか、それとも突発的なのか
すると何か「プッチーン」と切れた音がして、その瞬間

ーパチィイインン！

「いでっ！？」
「最っっっ低ぃぃ！」

クレアさんの制裁が、エンリケの頬を真っ赤にした
それは…まあ仕方ない。正当化された御仕置きだ
平手打ちだけで済むレベルではないが、クレアさんの本気の怒りっぷりにしどろもどろなエンリケは

ー今、一番情けなく見えた

「エンリケ以外なら飲ませてやるよ」
「えっ！？」

クレアさんの制裁で気が済んだのか、父さんはエンリケ以外を歓迎した。そりゃ当り前だと他のメンバーもぞろぞろとエンリケを放置し、トライは舌を出してざまあみろと侮蔑、ハンスはやれやれと首を振った
そしてクレアさんは…

「…たまには毒抜きしなさい」

と、医学的な観点で、エンリケに飲酒禁止令をつきつけて皆に続いた

取り残されたエンリケは少し涙ぐんでしゃがみ、地面にへたり込んで拗ねていた
可哀そうだとは思うけど…その罪状は、酌量の余地がない。いわば無銭飲食という犯罪と、弁償放棄してるのだから かと言って何となく一人ぼっちのエンリケをどうにか出来ないかと、僕は父さんに振りむいた
すると目を合わせた父さんが、何かを企んだかのように口を歪ませ
一つの提案をエンリケに提示した

「もし、どうしても許して飲ませてほしいと思うなら…条件がある」

その言葉に、素早く反応したエンリケは 父さんの言葉に耳を傾けた

…そんなに飲みたいんだ、な

そして父さんはその条件を、エンリケに語った

「地下道の…化け物退治でもしてもらおうかな？」

…父さんの有難い、慈悲を聞いて
それを実行する為にエンリケは今、ある場所に居る

しかし、それから一時間…位？
今だ帰ってこない、音沙汰も無い

「遅いね…エンリケ」
「そうねー」

次々と飲み物や料理を運ぶ僕の心配を、トライは呑気に対応した
彼女が飲むのは何時も僕が作るレモネード。二つのサクランボを入れるのが決まっていた

「まあ…永久に帰ってこれないかもよ？」
「まさか…たかがあの条件で？」

そう、父さんは
エンリケの罪状を許し、飲酒を許す条件として
「地下道の化け物退治」を要求した
化け物…最近なんだけど、各地で人間とは違う変な生き物が襲って来たり、作物を荒らしたりと被害を出していると言う報告が増えてきていた

深刻なケースは今のところないけれど、その奇妙な存在に調査や研究が進められているらしい
勿論市民にとっても不安要素、不明な存在なだけにあまり良い気分になっていない
その化け物が最近、この酒場の地下道に住み着いていたのだ　まだ被害…は来てないし、出てこないように頑丈に出入り口を固定しているのだが
父さんはそれしか対処のしようがないから、あまり満足していなかった
そこで、あの屈強と噂のエンリケに白羽の矢を立てた…と言う事なのだが

ーその、一時間前

「化け物…？」
「ああ、地下道に住み着いてね…出てこないように出入り口を固く固定しているんだが…出来るかな？」

そうして父さんはエンリケにグラスを投げつけた
それをいとも簡単に片手でキャッチするエンリケは、からかわれたとばかりに強気な声で反論した

「俺を誰だと思ってる？【紅獅子のエンリケ】様だぞ？」

紅獅子のエンリケ、それがエンリケの異名
不思議な事にエンリケは人ならざる力を使う事が出来ると言われていた
一説によれば特殊な技術を身につけていると言われているが、真相は分からない
ただ、その力を使うまでも無くエンリケは剣術だけでも名だたる名手であった

数々の空賊と戦い、鎮圧し続けていた
その歴戦の実力を、噂だけで聞いていたとしても
僕はそれを信じて疑わない

「そうだよ！エンリケならどんな化け物でも倒しちゃうよ！」
「おー流石はルーク、俺の良き理解者よ！」

両手を広げ、僕の擁護に感激しながら抱擁するエンリケに
眉間のしわを浮かべて、気に入らない素振りを見せる父さんは
少し間をおいて、空言のように
かと言って聞かせる相手はエンリケ本人だと、かすかにほくそ笑んだ

「チュー、チュー、紅獅子のエンリケに退治されちゃうデチュー」
「…」

からかっているのか、それとも嘲笑っているのか
父さんの真意は分からないけど
その「動物」の鳴き声に、何の意図があるかも察せない僕から
少し距離を置いて、顔をうっすら青くしたエンリケが父さんを直視していた

「おや…ご気分がすぐれないか？大した事も言ってないが」
「て…てめー…」

一明らかに、父さんとエンリケの間に何らかの含みがある
でも僕は普通に、これから向かう地下道での一仕事に、エンリケが支障をきたすなんて
その時は思わなかった
疑問符を浮かべるのは僕だけ、父さんの茶化しに
他の誰もが苦笑する。バカウケしていたのはトライだけ

「紅獅子のエンリケが出来ない事なんて、この世にあるのかどうか…さて、私の見分では疑いもしないが」
「…あーっ！くそっ、もう！分かった、お前の望み通りやってやらぁ！」

頭をかいて、やけくそとばかりに立ち上がり
地下道に促す父さんの後に続くエンリケを見ていた僕は

たった僅かの言葉の交差に含まれた
「父さんの悪戯」に全く気付かなかった

The regrettable fault of a brave lion.2

「でも…心配だな、何かあったのかも」

時が進む時計を見つめながら呟いた僕
しかし他の仲間全員は心配した素振りはない
唯一クレアさんだけは、少しだけ不安…というか、どうしたものかと思案しているようだった

「クレア、たまには御仕置きとしてあの位やらせてあげなさいよ」
「そ、そうなんだけど…」

クレアさんの向かいに座っていたトライが冷たく論した。少し酔いが回ったハンスも頷いている
多分皆は、エンリケが帰ってこない理由を知っているんだ
恐らく…父さんも。その父さんも別に気にしている素振りを見せていない。普通に調理や洗いものに励んでいる

「…でも、可哀そうだから…ハンス。迎えに行ってあげて？」
「…えー…？」

ほろ酔いで良い気分のハンスに、クレアさんがお願いした。多分エンリケがこのまま帰ってこない可能性を考えて、ハンスに助け船を出したのだ
その光景にやれやれとトライは笑みを浮かべ、クレアさんの補佐に回った

「副船長だしねー、船長の尻拭い位やらないと」
「今良い気分で酔いが…」

酒を飲むペンギンなんて聞いたことないが
それでも顔がほのかに赤いハンスは確かにほろ酔いで良い気分なんだろう
そんな最高な気分の状態を二人の女性に中断されるのだから反論したいだろうが、クレアさんの心配そうな眼差しに頭をポリポリと掻いた

「…はぁ…で、ヤンス」

もうこれ以上の飲酒は期待できないと諦めたハンスは、傍らに置いていた長い柄の斧を片手に持ち、立ちあがった 恐らく迎えに行くのだろう
女性には勝てない、それもハンスの優しさと言うか弱点と言うか…人の事言えないけど

しかしそのタイミングは、僕にとって

好都合だった

立ちあがり、地下道の出入り口を聞こうとしたハンスに僕は近寄って、ある提案をした

「ハンス、僕も付いて行くよ」
「…へ？」

その言葉にトライ、クレアさんは意外と言った感じで振り向き、父さんは少しびっくりしていたが
次第に表情が怖くなってきた

「…駄目だ、ルーク。相手は化け物だ。ハンスで十分…」
「み、道案内だけだよ…それに」

それに、と続く言葉を言おうとしたけど
僕はハッとして手で口を押さえた
父さんは何かしら疑っていたが、道案内という提案にハンスが有難いと頷いた

「迷うのは嫌でヤンス、道案内なら助かるでヤンスよ」
「…道案内ねー」

トライが何かを察しているみたいだが、それ以上は語らなかった
父さんはハンスの腕前も知っている、その実力を信じたのか、道案内だけならと許可をくれた

「…危ない真似はするなよ？ルーク」
「うん！」

そうして僕とハンスは、エンリケが居るはずの
地下道への入り口へと向かった

地下道へは、少し細く錆びた
直立の梯子を降りなければいけない
僕にとっては不便ではないが…

「ひぃ…ふぅ…はぁ…」

メタボなハンスにとっては最初の試練だった
ようやく地面に降り立った時点で体力を浪費している。戦闘的な実力は申し分ないはずなのに、
活動的な部分が弱点ならば何となくプラマイゼロと感じてしまう

「はぁ…梯子、嫌いでヤンス」
「もう少し錆びてたら…折れてたかも」

と、思いながら
僕は先が薄暗くてあまり見通しが良くない地下道を見渡した
一応小型の電灯も持っているが、それでは足りない位暗くて、少し危なっかしい

「いやーここで迷ったらアッシも多分帰れなかったと思うでヤンス」
「道案内…だけじゃないけどね」

僕の含み笑いに、ハンスは首を傾げた
それに応えるように、僕は懐から二つの短剣を取り出した
ハンスはちょっと後ろに下がってびっくりしたが、すぐに冷静を取り戻して
その短剣を所持している事実を問い詰めた

「ど、どうしてそんなもの…りんごむきに使うでヤンスか？」
「違うよ、特訓に使う為だよ」
ますます所持の理由が分からない、特訓と聞いて
何の特訓なのかとハンスは更に聞いてきた

でも、短剣で特訓と言えば、何となくわかるはず

「…戦闘の特訓だよ、ここの化け物で小さい奴を相手に…父さんに隠れて特訓してたんだ」
「戦闘の…なんでまた？」

そう、酒場の息子なのに
戦う事の鍛錬は必要ないはず
しかし今日、僕は皆に自分の決意を言う為に
今まで隠れて頑張ってきた
それを今、ハンスだけに先行してカミングアウトしても大丈夫だろうと、言おうとした

「あのね、ハンス…僕は、トリックスターの…」

大事な一言、を告げようとした瞬間

一何か、物音が聞こえて来た

その音に敏感に反応したハンスは僕の盾になり、斧を構えた。僕も緊張しながら短剣を構える
恐らく化け物が来たのかもしれない、と思って警戒していたが…

「ギャアアアアアアアアア…」
「…」

化け物…らしくない声？に緊張が少し解けた僕
ハンスはその声を聞いた瞬間斧を下し、ため息をついた。恐らく何か分かりきっているのだろう
その叫び声？が徐々に近づき、とりあえず短剣は構えたままだったが…

「ギャアアアアアッ！」
「え、エンリケ！？」

薄暗くて見えない先からはっきりと見えた姿は
明らかに動揺していたエンリケの必死な走行姿
エンリケはハンスの姿を見るや否や、走る速度を速め、すかさずハンスを抱きしめた

「ハハハハハハハハンスぅ！俺無理！ＭＭＭＭＭＭＭＭＭＭＭＭＭＵＲＩ！」
「はいはい…でヤンス」

無理宣言をしたエンリケをなだめるハンス
化け物が強かったのか？
だけど僕もそれなりに相手した…その化け物は、別に見かけはそう怖くも無く、際立って強い訳ではない…

だって…

「エンリケ…化け物って、ちょっと大きなネズミだよ？」
「わあってるよ！」

分かっている、と言う事は
そのネズミに対して無理を宣言していると言う事になる。屈強の戦士がネズミに対して敗北宣言
その理由はすなわち…

「…キャプテンはネズミが嫌いでヤンス」
「うん、もう分かってしまった…」

あの時父さんが「鳴き真似」をした時のエンリケの反応と、今のエンリケの無理宣言
要するにネズミが嫌いって事に、簡単に結論が繋がってしまった

「リカルドめ…俺がこの条件がクリアできないと分かって、あえて提案してきたんだぞ！」
「父さんも知ってたのか…」

ネズミの化け物を倒さなければ酒は飲めない
けど、別にエンリケの制裁と思えば不便はない
倒したとしても、安全が確保されるだけであって、父さんにとってはどちらにとっても利に繋がるのだ

「一杯喰わされたね…エンリケ」
「俺は…もう駄目だ」

ーエンリケの異名、そして歴戦の噂と実力への憧れ
色んな要素が陥落した瞬間だった

そんなちょっと情けないエンリケを見ていたら、エンリケが僕に目線を合わせた

「ルーク、もしかして俺を助けに来てくれたのか？」
「…え？」

恐らくエンリケは僕が持っている短剣を目にして、戦う意思があるのだと気づいたのだ
今更…まあ否定はしないし、それに頼られたという事は何となく気分が良い
がっかりした気分を払拭させる位、エンリケの言葉にしっかりと頷いた

「うん！僕も手伝うよ！」
「任せたぞ！青年！俺は常に後ろで様子を見る」

つまりエンリケは化け物を相手にする気持ちが既に萎えている、のだが
任されたというエンリケの期待に応えて
僕の本来の目的に、少しでも有利になるようにと
気合を入れた

一方ハンスは、そんな気持ちとは裏腹に
抱きつかれたままのエンリケを何とか引きはがそうとしていた

小さな電灯を前に向け、ハンスを先頭に次が僕
そしてびくびくしているエンリケが最後に続いて地下道を歩いていた
化け物…と言ってもネズミの化け物
その数は把握できていない

もしかしたら大量に居るかもしれないし、それを全部倒すとなれば、まあ一日では済まないだろう

「化け物…って、最近ニュースとかで目にするよね」
「正体不明の…異変生物としてな」

冷静に応えるエンリケ
勿論その存在を知ってるのだろう。もしかしたら何回かその化け物とも闘ってるのかもしれない
ただ、ネズミの化け物にはもう、白旗を上げていた

「オラバハルもインテルも、その調査に乗り出しているが…具体的な情報は明確になっていない。突然変異としか例えようがないってな」
「そうでヤンス…まあ深刻な被害はまだそんなに多発してないでヤンスが」

だとしても心配な要素であり、早くいなくなれば良いのにと思う。でもそんな弱気では、僕の決意に信憑性が霞む

だったら全部倒してやる、と言う意気込みを持つ方が、自分にとっても逞しさを表現するに値する

「…小さな化け物はほっとくでヤンス」
「そうだね…害はなさそうだし」

たまにキィィッと鳴く化け物は、普通のネズミよりやや大きいだけで、そんなに恐怖は感じないけどその度にエンリケが悲鳴を上げる

本当に嫌いなんだな…その理由は何時か聞こう
でないとだんだん株が下がる

「…ヒッ！？」
「！？」

暫く歩いていると、徐々にネズミの化け物の数が増えて来た。何だか僕達の存在を警戒しているのか、ネズミの大群がある場所へと集まっていく光景が見えた
その大群に、更にエンリケは恐怖の色を深め、今にも失神しそうだが

…もう少し頑張ってほしい

「ネズミが…集まってるでヤンスね」
「何か…大きな穴が見える」

大群が集まる先には、壁に空いた大きな穴
ネズミは全てその穴に入っていく
恐らくそこが住処なのかもしれない、と僕とハンスは警戒したが
エンリケはうろたえている、本当に使えない

「…！？」

穴の奥から、二つの赤い光
少し大きいその光が確実に僕達を狙いとして定めている。殺気が伝わるその光に、ハンスは斧を向けた
しかし僕は先走る勇気に、警戒よりも見せ場を作りたいと、ハンスを押しのけてその穴に立ち向かった

「る、ルーク！？」
「来い！化け物！」

僕の挑発に、けたたましい叫び声
そして穴が裂ける位の振動と共に、巨大なネズミが現れた
僕はある程度予想していただけに、意外と冷静だった。が、ハンスとエンリケはその異形に別の視点での冷静で相手を分析していた

「ルーク！いったん離れろ！」
「大丈夫だよ！こんな奴…倒してやる！」

エンリケの忠告を無視して、僕は勢いよく
ネズミの化け物に切りかかった
確かに僅かな傷をつける事が出来たが、それがネズミの逆上を煽り、太い爪を生やした手を振りかざした

「っ！」

避けないと！と思ったが
その手が振り下ろされるスピードは速く、もしかしたら無理か！と目を閉じたが
いきなり誰かに押されて、ドスンと地面に倒れこんだ

「いっ…！？」

痛さに目を開け、僕を倒した相手を見た
そこには片手剣で軽くネズミの手を阻止しているエンリケの鋭い表情、化け物へ威圧を感じさせるように平然と立っていた

「…無理はするな、ルーク」
「ご、ごめん…」

倒れたまま、謝った僕に
エンリケはその剣でネズミの手を軽くはじき、身をひるがえしていとも簡単に手を削ぎ落とした
一方ネズミはその痛みに悲鳴を上げ、更に怒りを増大させた
奇声とも言える恐ろしい声に、動揺しないエンリケは剣を軽やかに仕舞い、指で何かを空に描いた

「…フレイム=リヴェラ！」

聞いた事も無い言葉をエンリケが発した瞬間
その空から激しい炎が盛り、ネズミの巨体をあっという間に覆い、燃やし尽くした
悲鳴を上げながら悶えるネズミは、その炎になすすべも無く

…ものの数分で灰と化した

「…」

その力に、光景に
僕は言葉を失っていた
エンリケが強いと分かって、ネズミが怖いとちょっと萎えて、それでも最後はやっぱり強かったと
確信したと同時に、その力の神秘さと不思議に見とれていた

一方エンリケは少し…表情を曇らせていたが、すぐに僕に駆け寄って安否を気遣った

「ったく…若気の至りっつーか」
「…ごめんなさい」

しょげる僕に、ポンポンと頭を叩くエンリケ
何時もの…エンリケだ
やっぱり強くて格好いい、憧れのエンリケだと笑みがこぼれた…が

「…キャプテン、ネズミは克服したでヤンスか？」
「…」

ハンスのもっともな意見に、エンリケは暫し沈黙して…次第に顔色を悪くさせていた
あれ？克服とか…
そんな状況じゃ…

そして、地下道の全域に響くであろう

「ギィイアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

…エンリケの、ネズミに対する恐怖の悲鳴が 響き渡ったのであった

Family

地鳴りがする程の大げさな悲鳴を上げたエンリケは、その後泡を吹いて失神した
救ってくれた時の格好良さが一瞬にして消えた感じのまま、僕とハンスで何とか地下道から酒場へとエンリケを運んでいた

そこそこに重かったけど、ハンスが力持ちだから
僕一人じゃたぶん無理だっただろうな…なんて思って、当の失神した本人はと言うと…？

「うーん…うーん…」

酒場の片隅で椅子を幾つか並べ、そこに横たわり
先ほどの気づかなかった自分の疾患に気づいたショックで唸っていた
その光景を呆れて見ていたトライは、ハァとため息をついて軽く彼を蹴った

「おーい、このおっさん。今年で幾つだっけ？」
「…確か、32歳だったような、でヤンス」
「もう三十路超えてたのね…」

その30代を超えた大人が、ネズミごときに屈する
情けなくも、何となくそれもエンリケらしいなと次第に苦笑いを浮かべて容認するようになっていた僕
するとハンスが僕を見て、先ほどの勇敢を語った

「しかし…無茶とはいえ、まあ勇気だけは褒めてやるでヤンス」
「へー戦ったの？やるじゃん」

別に致命傷を負わせたわけではないが、それでも戦闘面で褒められた事に嬉しくて頬を染めた
しかしその発言が今のタイミングでは「マズイ」と言う事にすぐ気付き、しまったと思った瞬間、父さんの顔色が既に変わっていた

「…ルーク、戦ったのか？」
「…う、うん…」

父さんの声色に、ハンスもトライも何事かと目を合わせた。戦う事はトリックスターのメンバー

にとって当たり前。だけどそれは僕には今該当しない
そう、父さんは…

「なぜ戦った？危険な目に遭うかもしれないのに」
「そ、それは…」

その気まずい空気にハンスが立ち入る
少しうろたえながら、別に邪魔ではなかったと弁解してくれていたが、父さんはエンリケにまで確認を要求していた

「エンリケ…ルークは」
「物凄く働いてくれまし…グホッ！？」

戦ったという事実を肯定してくれたエンリケは、最後まで言葉を言えず、トライにみぞおちをえぐられた
トライも今の状況で、安易に僕が戦った事実を容認する事は
良くないと判断していたのだ

「この…バカオッサンが」
「ぐおおおお…痛い…ぃ」

悶えるエンリケ、一応弁論するハンス トライとクレアさんはそれを冷静に見守って、そして僕に視線を合わせた
何かあるのなら、戦う意図があってハンスに着いていったのなら、自分が今言うべきだと、特にトライは視線で父さんへの発言を促した
僕も黙っている場合ではないと、父さんに近付いた

「…道案内だけだと言ったはずだ、それを…怪我でもしたらどうするんだ？」
「僕だって…それなりに特訓して、強くなろうとしたんだ！父さんに黙って短剣も買って…毎日特訓してた」

その事実に父さんはとうとうカウンターをバァアン！と叩いた。ビクッと怯んだが、僕はもう最後まで言うべきだとうなだれるエンリケに向き直った

「エンリケ！」
「お、おう？なんだ？」

僕のめったに発しない気合の入った声に、流石のエンリケも少し油断したのか、よろけながら僕を見た 父さんが割り込もうとしたけど、それよりも先に僕は自分の意思を、決意を語った

「僕は…トリックスターのメンバーとして、一緒に世界を旅して、戦いたい！どうか…仲間として雇ってください！」
「ルーク！」

最後まで言い切った僕に対して、父さんは僕の名前を言う事しか出来ず
そんな父さんをエンリケは視線で制止した

「リカルド、今ルークは俺と話している。お前は介入するな」
「駄目だ！お前が何を言おうと駄目だ！そんな危険な真似…」

エンリケは僕の言葉にちゃんと耳を傾けているのに、父さんが何が何でもと妨害しようとする
僕はその父さんの理解を示さない態度に少しいらだってきていた

「父さん、僕だって…戦える。未熟だけど…勇気だってある！生半可な気持ちで言ってない！」
「駄目だ！」
「トライだって、戦ってるんだよ！」

思わず自分の名前を出されてびっくりしたトライ。それでもその言い訳に別に口を出さなかった

「トライは…トリックスターが家なんだ。お前はここが家なんだ…」
「…」

何時だって、父さんと一緒に過ごしてきた時間が長かった分、父さんの言い分に中々反論できない自分
それがもどかしくて、何も言えず 僕は外に駆け出した

「ルーク！？」

自分がトリックスターに行きたいが為にどんな傷つく言葉があったとしても、父さんへの想いもあるがゆえにそれを言う事が出来なかった

皆と一緒に行きたいなら、それだけの決別の決意があってもいいと思うのに
…そんな気持ちがどことなく情けなかった

一父さんの声が遠くなる、聞こえなくなるまで
走り続け、じわりと涙が浮かんでいた

…外は、もう暗くなっていた
街の人もそんなにいない
それが今の僕にとっては好都合だった

泣いてるなんて、誰にも見られたくないから

僕は、お小遣いを貯めて先に買った短剣を 取り出して数回振った
慣れないけど、本を見ながらのにわかな構えを真似しながら、今の気持ちを斬っていた

空が、裂く音だけが
空しく響く
その繰り返しで、何もしゃべらない僕に
後ろから呑気な声が聞こえて来た

「若いってこういう事なのかしらね～」
「トライ…」

トライが両ポケットに手を突っ込んで
呑気そうに歩いてきた
にまにまとした笑みを浮かべ、もしかしてからかわれているのかと僕は何となくムッとした

「別にからかってないわよ。ただ意外かな～と思ってね」
「僕が…トリックスターのメンバーになりたいって事が？」

そうよ、と頷いて
僕の隣をすり抜け、前に立つ
ようやく浮かんだ月光が彼女の背を照らし、逆光で表情が暗くても、その顔が真剣だと僕には分かる

「リカルドおじさんも心配なのよ、貴方って、そんなキャラじゃないし」
「それ、偏見…だし」

確かに僕みたいな風貌だと、街に溶け込んで
酒場をのんびり営むほうが性に合ってるのかもしれない。だけどエンリケと出会い、様々な物語や武勇伝を聞くたびに、心が少し変化していた

一外を知りたい、という旅立ちの芽を芽吹かせて

「…何時も、エンリケやトライが語る話、とても楽しくて…だけど楽しくても、僕はその当事者じゃない。何時だって…疎外感は感じてたよ」
「…ルーク、私達が何時でも楽しい時を過ごしていると思ったら大間違いよ？」

ずいっと顔だけ近付けて、キリッと睨むトライ
今の僕の考え方と理想に、現実と言う厳しさを伝える大切さを秘めた眼差しだった

「貴方も分かってるけど、トリックスターは戦艦…空賊と戦う、空の安全を守る役目があるの。危険だって何時どこに潜むか分からない。傷ついて…亡くなった人もいたわ」
「…」

そうだろう、危険だって事は十分わかっている
父さんだってそこを一番心配しているのかもしれない
死と隣り合わせの現実を、トリックスターは覚悟して空を駆けまわる

「夢物語だけを期待されて着いて行きたいなんて思われても困るわ。貴方、それも全て分かった上での決意なのかしら？」
「…」

試されている、僕は
同い年でも、僕より現実を知っているトライが
決意の信憑性を、僕の眼差しの光だけで知ろうとしていた

「…僕は、この町だけが。僕の一生の世界として終わらせたくない」
「…」

こんなに女の子に近付かれるなんて滅多にないけど

今は試されてると思って、そんなに動揺はしなかった
トライもこれ以上論しても無駄だろうと距離を置き、ため息をついて笑った

「だったらもう一度ぶつかりなさいよ。それで負ける位なら着いてこないで貰える？男ってのはね、多少痛みに強くなって貰わないと困るの」
「わ、分かってるよ…」
「分かってるならさっさと行きなさいよ、私はもう少しこの辺で涼んでるわ〜」

同い年なのに、育った環境から
やはり年上の様な逞しさと余裕を感じながらも
僕だって負けまいと、少し威勢を見せたが
すぐに額にデコピンされた

「痛っ！？な、なに…」
「メンバーになるんなら私が先輩になるの。今から上下関係位意識しときなさいよ」

確かにメンバーになる事が出来たら…一応トライが先輩になるのか。まあこの性格にもこれからずーっとお付き合いするのなら…少し心を鍛えとかないといけないなぁと思いながら

涼むと言ったトライを置いて、僕は酒場に戻った

Family2

ルークが飛び出した後、暫くして
トリックスターのメンバーは微妙ながらも酔いつぶれ、意識のある者が適切な場所に寝転がせていた
クレアは少し眠ると言って、私の部屋を貸した
ハンスは…いびきをかいて横たわっている

つまり、今この酒場で起きているのは
私とエンリケだけだった
カウンター越しに向き合って
慣れた酒を飲み交わす
何時もはここにハンスも加わるが、今は二人で話し合う方が良い

「ルークが…私に隠れて特訓をしていた事は知っていた」
「へぇ…過保護なお前がね」

過保護と言われて、少し不機嫌になった
エンリケだって見も知らぬ貧しい子、トライを受け入れハンスと共に大事に育てて来た経緯があるからだ
人の事は言えないだろう

「…あの子は、外を見たかったんだろうか？」
「一概に普通の子が皆同じくそう思うとは断定できないが…ルークはそう感じたんじゃないか？」

確かに、この街で
一生を終えたって良いと思う子もいれば
世界が知りたくて外に旅立つ勇敢な子もいる
大切に育てて来た我が子、ルークがその度たちを決意していた事に、私の子離れしていない部分が納得を示さなかったのだ

それは…多分私が大人げないのだろう

「確かにちょーっと無茶はするけどな…俺はルークの気持ちってやつが本物だと分かったよ」
「若いからな、無茶もするだろう」

聞いた話では少し危なかったらしい。それをエンリケが食い止めて難を逃れた
だが、そこまでして自分の決意を表現したかったルークの気持ちは、エンリケの言う通り本物なのだろう

「…俺は、トリックスターと言う場所を家と例えている。そこに住む者は仲間であり…同士だ」
「そう、お前は…【あの時】から変わると決意したのだからな」

あの時、を深くは掘り下げない
お互い分かっているからだ その言葉に苦笑いを浮かべたエンリケは、少し酒を口にした

「…仲間だから、同士だから、家族だから。俺はその全てを守る義務がある。だが…決して生ぬるい仕事をしている訳じゃない」
「…そうだな」

トリックスターはただの遊覧船ではない
空の安全を守るために戦う、戦艦なのだ
つまりルークにはその戦艦の仲間として、戦う決意をもう決めていた事になる
外が知りたいだけなら、旅に出ればいいのに。そうじゃなく、共に戦いたいと思っているのだ

ーそこが、成長した証なんだろうな

「…俺は、どんな決断をしても。守る事が優先されるならば非情にもなれる。その俺に…命を預ける覚悟はあるか？ルーク？」

エンリケはそう言って、椅子を回転させ ドアに立つルークを見た

僕は、真剣な眼差しの エンリケから目をそらさなかった
確かに危険だった、僕の無茶を知りつつも 戦いたい、共に旅立ちたいという覚悟を試そうとしているんだと

父さんも同じく、真剣な目で
僕の言葉を待った

僕は…持っていた短剣を握りしめ、真っ直ぐに二人を見て、答えた

「僕は…」

一翌日、少し日が昇った位の朝 トリックスターは離陸の準備に追われていた
整備の担当者であるトライも確認を終え、ハンスもプログラムで離陸態勢の形状を整えていた
エンリケはこれから向かう行き先のルート確認を本部と相互通信し合っている

そして、僕はと言うと…

「何か、ドキドキする…」
「その乙女チック、キモイ」

あてがわれた座席に座って、シートベルトも閉めて
もじもじしていた僕にトライが吐き気を表現した

だって初めての場所だから仕方ないじゃないか

「新人だからって、手加減はしねーぞー」
「具合が悪くなったら何時でも言ってね？」

エンリケとクレアさんの相反する気遣いに
僕は緊張しながら頷いた
ハンスはようやく離陸態勢が整ったと報告したのち、エンリケに発進許可を取っていた

「じゃあ、そろそろ行くか！」
「ながーい空の旅の始まりね。また運動不足で太っちゃうかも…」

背伸びしたトライに、エンリケがフッとため息を漏らした。何か皮肉っぽく…

「じゃあ、ルークに手伝って…ギャアアッ！？」
「そのくせ毛全てひっこ抜くぞオラァ！」

エンリケの語る意図を理解したトライがエンリケの髪を強引に引っ張っていた
もうそれは抜けそうな位に…クレアさんはため息をついていた
ハンスもやれやれと言った感じだ

「いでで…もう！俺キャプテン！敬え！」
「発言の品質が伴ってないから敬わない！」

子供じみた言い合いに仲介したクレアさんが、二人の頭をコツンと叩いた
フンッとお互いそっぽを向いたが、改めてエンリケはキャプテンとして発進命令を下した

「では！空の旅へレッツゴー！」
「ごー！」

僕も習って、拳を天に向けた
そこには太陽が輝いている

ーこれが、僕の、僕の仲間の
そして全ての人々と世界を巻き込む壮大な物語の幕開けとなる

…そんな運命をまだ知らないトリックスターの戦艦の姿を眩しそうに見送っていたリカルドは
笑みを浮かべながら、我が子の未来を祈り続けた

The problem precedent to departure

…

声が、聞こえる…

…

僕だけが聞いているのだろうか？
分からない、視界が真っ暗で誰も居ない…
そもそも自分がいまどんな状態なのかも分からない

…

え？何？何を…聞こえないよ

…『君、は…』

僕…？が？僕が何をしたの？

…『最後まで…僕の人間に対する迷いがない事を信じたのかい？』

信じた…？ 僕は貴方を知らないよ？

…『いや、君は僕を知っているよ』

知らない…知らないよ
声も、聞いた事…

…『無い、と言えるかい？』

え…！？

…『君を恨む訳ではないが…最後に友達と話したかった…』

僕…貴方に何かをしたんですか？
教えてください！何を…貴方に悲しい事をしたんですか！？

…『でも、いずれ必要となるのなら…仕方ないのかもしれない』

…貴方は…

…『僕は…貴方を…』

【そこまでして今は伝える必要はない…偉大なる魂よ】

ーその声が、最後の誰かの言葉を プツンと強制的に切った気がした…

…

ードサッ！

「イテッ！？」

僕はいきなり重力に従って、床に落下した
思いっきり身体を打ちつけて、少し痛みに絶句した様子を見て、船員が笑っていた

「よお、新人。具合はどうだ？」
「…うう、物凄く悪いです」

僕はトリックスターに搭乗する事を許されてから
暫くして身体の異変を感じた
クレアさんの診察によれば「船酔い」らしく とりあえず船員室で休む事を提案されて、ベッドに横になっていた

…去り際に、トライのため息がとてつもなく重かったのは言うまでも無い

「はは…船酔いとはな。まあ中にはそういう奴も少なからずいたけどよ」
「そう言うのって克服できます？」

船員になりたいと言った手前、克服しなければただのお荷物。そうはなりたくないと何か方法があるかと聞いてみたが、船員は首をかしげていた

「…慣れるまで、我慢？」
「…ですよねー…」

このまま適応しなければ、なんだか申し訳ない形で故郷に帰る事になる。その時の父さんの顔が多分見れない
…ヤバイ、てか本当にヤバイ
船酔いの要素があるなんて、自分でも気付かなかったから、これは予測できてない事態だった

「…あれ？」

さっき僕…誰かと話してたような？
寝てた時かな？
でも…あんまり覚えてないな
何を言ってたかも…いまいち 気のせいかな…
と思いながらとりあえず立ち上がり、背伸びをした

「まあ少し歩いたらどうだ？じっとしててもあまり改善されないだろう？」
「そうですね…はい。そうします」

聞こえたような何かには、もう気にすることなく
僕は船員室を出た

船員室を出ると、そこは渡り廊下
平面に並んで各施設への入り口がある
食堂や、副船長室と船長室、そして医務室がある
トレーニングは主に船員室やこの渡り廊下で自主的にやるらしい

向かい側には丸い窓が並列に並んでいて 外の景色が見える
気持ちのいい景色なのに、胸が気持ち悪い
気合を入れようと頬を叩いたが、そこへ今一番会うべきではない

…お局が現れた

「…でた、肩すかしボーイ」
「…トライ」

トライだった 呆れた、と言った表情で僕を見ている
それもそうだろう、あれだけの決意を論じた結果、船員になれたのに早速船酔いと言う、まず問題外な問題を発症してしまったのだから

「船酔い位…克服してからそういう威勢を言ってくれる？弁論した私が恥ずかしいわ」
「船に乗った事ないから分からないんだよ…」

今までそんな船に乗った経験が無いから、症例があるなんて自覚はない。その弁解すら更にため息で押し消されてしまう

もう…何も言えないが

「とにかく、改善する努力ぐらいしてよね。何時までもクレアの薬に頼ってもらっても困るわ」
「分かってるよ…って、トライは何しに行くの？」

トライは仕事を終えたのだろうか、渡り廊下の一番端、ドック内部の方向から出てきていた
その問いにまあね、と肩を上げ。すたすたと僕の隣をすり抜けて歩いて行った

「ちょ、トラ…」
「暇つぶしに行くだけよ、女を尾行するなんてサイテー」

悪戯な笑みを浮かべて、トライは舌を出した
まあ先輩…なのだから、ここは我慢としか言いようがない。何時か…その地位を覆すか、同等にならなければ…胃が持たない
そんな暇つぶしを試みるトライを見送りながら僕はどうしようかとうろうろしていた
ドックは…精密機械があるらしく、あまり初心者が入る場所ではないらしい。だから暫くは近付かないように注意されていた

気がつくともうトライの姿は見えない
僕はそうだ、と思ってトライの向かった方向に「ベランダ」がある事に気が付き、そこで風を浴びれば体調も改善するだろうと思いついた
気分転換にも丁度いい、それに…もし吐く時が来たら、ご迷惑にもならないので

…と僕はベランダへ向かった

ー

The problem precedent to departure2

「ZZZ…」

呑気に自分の座席で眠っている、トリックスターのキャプテン。エンリケ
別に今は緊急事態でも仕事でもないから、寝る事には罪はない

が 寝ている事は、私にとって好都合であり、彼にとっては最悪な結末を迎えるだろう

ーという名の暇つぶし、を今から実行する

「…トライ？」
「シーッ」

ハンスが気づいて私に話しかけたが
黙ってなさいと仕草をした 私が持っている「油性マジックペン太め」に気づいたハンスは
やれやれとその悪行を見なかった事にしようとしていた

「ウシシ…寝ているアンタが悪いのよ」

と、キャップを取って
気分転換にエンリケの顔を「改造」する 眉毛をつなぎ、ちょび髭も描き、後は…

うん、この言葉しかないな
と、すらすらと達筆で文字を書いた

ベランダに向かうと決めて、そこに繋がるドアを開いた瞬間。風が僕をあっという間に包んだ
その勢いに少し押し倒されそうになって、目を閉じたが、やがて慣れてそこに居た人物に気がついた

「…クレアさん？」
「あら、ルーク。調子はどうかしら？」

クレアさんがベランダに先乗りしていた
まあクレアさんならトライほど毒を吐かないだろうと少し安心しながら隣にお邪魔した
少しぐったりしながら、ベランダの縁にもたれかかり、隣で僕の姿が可笑しいのか、上品な笑い声が聞こえて来た

「…こまったわね、それじゃ。エンリケも脱帽してたわよ？」
「すみません…こんなはずじゃなかったのに」

ちなみにエンリケが脱帽したと言って、本当に帽子を取った訳じゃない。中身は気になるのだが

「まあ…実際船酔いな新人も居たから、そのうち貴方も克服するわよ。大丈夫」
「だと良いんですが…」

僕はちらっと、ベランダの隅に置かれていた
ロープを目にした
もしかしたら…と思ったが、それは口にしない
そんな非情な…キャプテンではないはずと、少し信じてみる事にした

「おー、お二人で良い雰囲気だな」
「あら、エン…！？」
「ちが…っ！？」

背後から聞こえたエンリケの声に
僕とクレアさんは反論したが、その反論が中断された。なぜならばそのエンリケの顔には…

「…？どうした？」
「え、エン…リケ。あのね…その、顔…」

クレアさんがしどろもどろに、しかしさりげなく笑いをこらえて必死に現状を訴えようとしていた
エンリケも顔、と聞いただけで自分の顔に何かついているのかと、ベランダの鉄製の縁に自分の顔を近づけた

…瞬間

「…うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

案の定、悲鳴が聞こえた
悲鳴と言うより、なんじゃこりゃーな感じ
それもそのはず、エンリケの顔には黒のマジックペンで落書きが施され、まーその芸術と言ったら小学生レベル

そんなうろたえるエンリケを見ながら僕はふと思った…
さっきそう言えばトライ、暇つぶし…って言ってたような

…黙っとこう 言えばトライに殺されてしまうかもしれない

「なんだよこれ！髭！眉毛！それに…頬に『ムッスリスケベオヤジ』って…トライか！」
「そうとしか思えないわね…お似合いよ」

クレアさんがもう限界だとその状態を笑う
エンリケはプンスカと怒っていたが、トライを咎めようとしたそのエンリケの手を取り、クレアさんは自分が持っていたハンカチで彼の顔を拭いた

「隙が多い貴方が悪いのよ…ふふ」
「…っ、や、やめ…」

明らかに照れているエンリケ。少し顔を赤らめていた。何だかエンリケとクレアさんってお似合いだな…
とか思ってしまう。実際本当にエンリケも格好良くて、クレアさんだって清楚で可憐だし…

ーカップル？か？ いかん、僕小学生レベルな事考えた

「…い、良いから。後で洗うし！」
「あ…」

エンリケは恥ずかしくてクレアさんの手を押しのけた。その瞬間ハンカチが空に飛んであっという間に消えた
そのハンカチの行方よりも、エンリケとクレアさんが今手を繋いでいるその状況が気になってしょうがない
僕、ここに居ていいのかな？
何だか二人も少し…顔が赤いし、えーじゃ…おいとましようかな

…と思った瞬間

「…？」

ーエンリケの顔が、ふと変わった
何かを感じ取った、真剣な眼差し

そして僕も、何かを聞いた

【…ミツケタ…我ガ、鎮座スル…ベキ、ソノ身…】

その言葉の意味も、言った言葉の痕跡も確信が持てないまま
僕とエンリケは空を見た

その瞬間…！

ドカァアアアアアアアアンン！！！

「っ！？」
「キャアッ！？」

エンリケが倒れかかるクレアさんを抱きしめて
僕は縁によりかかっていた

それだけの衝撃を震わせながら目の前に現れたのは

「…戦艦！？」

黒煙を上げた、謎の戦艦だった